

大西洋奴隷貿易の被害賠償について

クウェシ・プラット・ジュニア、ロビン・ジャスパート

インターナショナルリスト 360° 2026 年 7 月 20 日

[On Reparations – INTERNATIONALIST 360°](#)

2026 年 3 月 25 日、ガーナのジョン・ドラマニ・マハマ大統領は国連総会に決議案を提出しました。この決議は、アフリカ大陸から最低推定で 1,260 万人が拉致された大西洋奴隷貿易を、歴史上最も重大な人道に対する罪と宣言しました。この決議はアフリカ連合(AU)とカリブ海諸国連合(CARICOM)諸国の支持を受け、123 票の賛成票で勝利を収めました。

この決議に反対したのはアメリカ合衆国、イスラエル、アルゼンチンのみでした。欧州連合(EU)加盟国は棄権票を投じました。したがって、その犯罪の主たる加害者たちはそれを犯罪として認識していません。それでも以下に紹介するインタビューで、クウェシ・プラット・ジュニア氏は、この決議を奴隷制、植民地主義、新植民地主義に対する長い闘いの一歩、そして補償的正義(注))の前進と見なしています。ガーナ社会主義運動の事務総長として、同氏は賠償要求の普及に大きく貢献し、マハマ大統領の序文がついた『賠償:歴史、闘争、政治、法』という著書を執筆し好評を博しました。ガーナの首都アクラで行われたこのインタビューで、プラットは補償的正義とは何か、そしてそれがアフリカおよび世界の社会主義運動にとってなぜ重要なのかを説明しています。

(注)補償的正義(reparative justice / reparatory justice)とは、単なる金銭的賠償ではなく、奴隷制・植民地主義・ネオ植民地主義によって破壊された世界構造そのものを是正し、再構築することを目的とする正義概念と説明している。

奴隷貿易がなぜ今日まで深刻な影響を及ぼしているのか

ロビン・ヤスパート：大西洋奴隷貿易が現在まで続き深刻な影響をお呼びしているといのはどういうことでしょうか。か。

クウェシ・ブラット Jr. : 大西洋奴隷貿易は私たちに非常に深い影響を与え、今もなお影響を及ぼしています。私が見た最も低い推計でも、1,260 万人のアフリカ人が連れ去られ、奴隷にされ、アメリカやヨーロッパの農園で家畜同然に働かされました。彼らが生み出した富によって、今日の西ヨーロッパ、資本主義ヨーロッパの基盤が築かれたのです。

そして、連行された 1,260 万人一人につき、さらに 3 人、つまり 3 倍の人が殺されました。抵抗の戦争がありました。奴隷として連れて行かれたのは最も壮健な者たちで、奴隷商人は弱く病気の人間を望みませんでした。彼らは若者を連れ去り、建築家、技術者、医師を奪いました。これがアフリカの科学の発展に深刻な影響を与えました。

一例だけ挙げましょう。新型コロナの際、ワクチンという技術について議論がありました。実は、ワクチン接種の科学は西アフリカで発展したものであったのです。しかし私たちはそれを失ってしまった。完全に失ってしまった。その結果、本来は私たちのものであった科学なのに、いま私たちはワクチン供給を西側の資本主義国家に依存するようになってしまっているのです。

ヨーロッパが優れているとの前提

奴隷制という制度は、アフリカ人が劣っているという前提だけではなく、むしろヨーロッパ人が優れているという前提の上になりたっていたのです。1452 年の教皇勅書（パーパル・ブル）は、ポルトガル王アフォンソに、われわれの世界に入り込み“文明化”する権限を与えましたが、そこにはアフリカ人が劣っているという巨大な前提があります。また、人々を捕らえて家畜のように使うことなど、彼らを自分たちと平等だと考えていたら決してできません。この“われわれが人間として劣っている”という前提こそが問題なのです。そして今日でも、われわれは人種差別、人種的侮辱、人種的搾取などに苦しんでいます。こうしたすべての根源は、大西洋奴隷貿易と古典的植民地主義にあり、その表現形態が今日の新植民地主義なのです。

RJ: 奴隷制がブラックの人々を劣等化する基盤を築いたから……。

KP: その劣等化が、植民地主義の基盤を築いたのです。 植民地主義が私たちに何をしたのか理解したいなら、アフリカのどこでもいいから鉄道網を見ればよい。 ガーナでは、すべての鉄道が富の集中する地域――金、ボーキサイト、ダイヤモンド、木材などがある地域――から始まり、すべて港で終わっています。 この“抽出のシステム”は、私たちの国の中で付加価値を生み出すことを促すものではなく、単に価値を外へ吸い出すだけのものでした。

RJ: こうした関係性について高い認識が今日のガーナにあるのでしょうか。

教育による洗脳によって

KP: 認知度が高いとはいえないかもしれませんが。なぜなら、これらの支配と搾取のシステムは、私たちを無知で愚かにするためのもう一つのシステム、つまり今日まで運営が続けられている教育システムも伴っていたからです。学校では、奴隷貿易や植民地主義の良い面と悪い面についてのエッセイを書かされました。これは完全な洗脳です。

この国の運営を担ういわゆる教育を受けた人々も、何年もこの洗脳を受けてきました。私が子供の頃、みんな日曜学校に通わなければなりませんでした。日曜学校とは何だったのでしょうか。それはキリスト教の洗脳制度でした。そして日曜学校に行かなければ、月曜の朝に 12 回から 24 回の鞭打ちを受けました。日曜学校はアフリカ文化が劣っているという考えを強めました。つまり、イエス・キリストを天国への道として受け入れなければ永遠に破滅するという考えでした。ですから、私たちのなかに、大西洋を越えた奴隷貿易と植民地主義の残酷な影響を理解していない人びとがいるのは不思議ではありません。

RJ: それにもかかわらず、ガーナのジョン・マハマ大統領は 3 月 25 日に国連総会に大西洋奴隷貿易に関する決議案を提出し、これを歴史上最も重大な人道に対する罪と位置づけました。この国連決議に先立って何があったのでしょうか。

国連決議が開いた新しい章

KW: 決議によって もう一つの章が開かれました。私たちはこれまでずっと支配、抑圧、搾取に抵抗してきました。奴隷商人との戦争がありました。奴隷船には反乱の証拠があります。プランテーションにも反乱の証拠があります。ハイチは、トゥーサン・ルヴェルチュールによって建国された最初の独立黒人共和国でしたが、これも抵抗から生まれたのです。古典的植民地主義に対する闘いも、その抵抗のもう一つの表れでした。私たちは時代を超えて抵抗してきたのです。

RJ: 倍賞の要求については、この決議に先立って何があったのでしょうか。

KW: 補償 (reparations) を求める声は非常に古いものです。カリブ諸国は、はるか以前からこの重荷を背負ってきました。アフリカ連合 (AU) が補償の闘いに本格的に力を入れ始めたのは、つい最近、昨年のことです。

忘れてはならないのは、いくつかの国——とりわけイギリス——が、ずっと以前に補償を支払うことを決めていたという事実です。しかし彼らが補償を支払った相手は、奴隷ではなく 奴隷所有者 でした。イギリスは、奴隷所有者の子孫に対して、なんと 2015 年まで補償金の支払いを続けていたのです。

補償は新しい現象ではありません。新しい要求でもありません。私たちは、ホロコーストの犠牲者に支払われた補償をよく知っています。ナミビアで虐殺された人々に支払われた補償のことも知っています。

国際連帯の広がり示す

今日重要なのは、アフリカの人々とカリブ海の人々がこぞって、アフリカ連合 (AU) の全 55 か国とカリブ海諸国連合 (CARICOM) 加盟国すべてがこの決議に賛成票を投じたことです。それは新たな高みです。この決議が可決されたことは、共通のテーマや要求のもとに団結し、闘争に対して国際的な連帯を広げられることを示しています。123 か国がこの決議に賛成票を投じたことは、私にとって、私たちの闘いにとって最も重要なことです。

しかし、この決意はすべての始まりでも終わりでもありません。第一に、総会の決議は拘束力がないことを認識しなければなりません。それはジェスチャー

です。まだよちよち歩きの一步です。ここから何をするかが決定的になります。一つの問題は国連自体の構造です。そしてこの決着は重要な物語を語っています。世界には 14 億人のアフリカ人がおり、非常に大きな人口です。にもかかわらず、国連安全保障理事会にアフリカの声はまったく反映されていません。重要な決定がなされ、拘束力のある決議が可決されるのは安保理ですが、私たちの声は総会に限定されています。世界の大多数が私たちの味方になっても、総会で可決される決議には効力がありません。では、なぜそうなのでしょう。これは、国連が設立されていた当時、私たちのほとんどの国が植民地であったからです。彼らはテーブルに着けなかった。国連の諸機関は植民地当局とその同盟者の利益を促進するために建設・構築されたのです。

賠償正義（修復的正義）の要求は世界の作り替え

私はいつも、修復的正義とは世界をリセットすることだといってきました。まったく新しい世界を築くことです。そしてその新しい世界には、国連や国際機構、世界銀行、国際通貨基金、世界貿易機関などの諸機関の全面的な見直しを伴います。

RJ: ということは賠償を求める闘いを、解放や世界のリセットを求める、より広範な闘いの一部と見なしているわけですね。

KW: 世界の完全なリセットです。修復的正義をお金の問題だと考え、実際にそう主張する人もいます。私はそれを大きな侮辱だと思っています。どんなに資金が払われても、大西洋奴隷貿易、古典的植民地主義、そして今日の新植民地主義によってアフリカの人々に与えられた損害は修復できません。どんなにお金を払っても、その損害は報われないのです。

倍賞正義の本質は、世界の公正な再構築、まったく新しい世界をつくることです。グローバルな資源が健康を促進し、教育へのアクセスや適切な住宅へのアクセスを促進する、まったく新しい世界です。搾取による余剰価値の持ち出しを基盤に発展しない世界に作り変えるのです。

社会主義の道しかない

アフリカでは、進むべき道は先進資本主義国家のモデルを模倣することだと言われることが多いです。歴史をよくみれば、そんな選択肢はないことは明確です。今日では、イギリスがやったように人々をとらえてきて余剰利益を生み出すような人はもういません。植民地化にできるような土地也没有ありません。西側が使った選択肢は私たちには使えないのです。私たちに残された唯一の道は、集団として自立して生産をおこない、人間の欲求を満たすことです。そしてそのシステムにはただ一つの名前しかありません。つまり社会主義です。アフリカの人々、そして世界にとって意味のある発展への道は一つしかない。それが社会主義の道です。

RJ:賠償に関するあなたの著書では、大西洋奴隷貿易のジェンダーに基づく論理と賠償の視点が書かれていますね。

KW: はい。なぜなら、世界を再構築には、男でも女でも、すべての人が自分の可能性を最大限に発揮できる世界にしなければならないからです。そして父権制の世界ではありえません。ジェンダー平等は私たちの前進にとって極めて重要です。ガーナのような国では、女性は人口の約52%を占めています。人口の52%がその潜在能力を十分に発揮できなければ、どうやって開発を達成できるのでしょうか。ですから、性別の問題は修復的正義を求める闘いの中で最優先であるべきなのです。

決議への反対は米、イスラエル、アルゼンチンだけ

RJ: 国連決議の採決結果は予想通りでしたか。それとも驚きがありましたか。

KW: 驚きは全くありませんでした。

RJ: アメリカ、イスラエル、アルゼンチンが反対票を投じると予想していたか。

KW: はい、彼らにはその歴史や現在の行いがあるからです。我々が求める修復的正義の影響を最も受ける国の一つがアメリカ合衆国です。彼らにはプランテーションの歴史、人種差別、そしてアメリカ大陸の先住民を絶滅させた歴史があります。イスラエルについて誰が驚くでしょうか。この国は今まさにゲノサイドを行っています。ガザでは8万人のパレスチナ人が虐殺されています。そのうち3分の2は女性と子どもです。イスラエルは帝國的な野心を持ち、人命の犠牲を顧みずそれを追求しているのです。アルゼンチンは多くの奴隷を抱えていました。プランテーションがありました。しかし今日、アルゼンチンの黒人人口は減少して、いまま減少し続けています。この国にはアフリカ奴隷の子孫を経済や社会生活に統合する雰囲気がありません。

ホロコーストとの関連について

RJ: 欧州連合（EU）諸国が棄権した理由の一部は、決議文に「最も重大な犯罪（the gravest crime）」という最上級表現が使われていたことでした。EUはこれが「ホロコーストは歴史上唯一の特別な犯罪である」という自らの立場を損なうと主張しました。これをどう思いますか。

KW: 誰が言おうと最も愚かな議論だと思います。彼らは「法律に上下関係を設けるべきではない」と主張しますが、法律にはもともと階層性があるのです。万引きと殺人では刑罰が違うのです。だからガーナには、治安判事裁判所、巡回裁判所、高等裁判所、控訴裁判所、そして最高裁判所という階層構造があるのです。犯罪の階層制度導入に反対するこの議論は、まったく愚かです。

ガーナ駐在イスラエル大使をはじめとする関係者の主張のポイントは、かれらが歴史上に発生した重大犯罪を比較検討しているという点です。数字を見ればわかります。歴史的事実として、ホロコーストでは600万のユダヤ人が犠牲になった。そして、大西洋奴隷貿易では1500万のアフリカ人が苦しみ、命を奪われた。つまり、単純に数だけを見ても明らかだということです。

長期的な影響という観点から見ても、結論は同じです。今日のアフリカは、本来なら世界で最も豊かな大陸になり得ます。耕作可能な土地の3分の2を持ち、コンゴだけでも74兆ドル規模の鉱物資源が地下に眠っています。

それなのに、アフリカを見渡せば、絶望と貧困が広がっている。こうした状況は、他のどこに見られるでしょうか。イスラエルに同じような状態がありますか。いいえ、イスラエルは階級社会であり、労働者階級はブルジョワジーのために働いているとしても、アフリカの労働者階級よりはるかに保護されています。

だからこそ、大西洋奴隷貿易は人類に対する犯罪の中で最も重大なものだと言えるのです。イスラエル側は「それではホロコーストの影響が薄まる」と主張しますが、事実を直視すれば、そうならざるを得ません。そもそもそんな議論に誰が関心をしめすのでしょうか。

RJ: ヨーロッパ諸国、特にドイツには、こうした態度をとる歴史的な理由があります。しかし、その多くは誤った歴史の教訓に基づいています。本来ならジェノサイドと闘うべきなのに、ドイツはむしろイスラエルによるジェノサイドを支持しているというわけです。

KP: それなりの理由があるのは事実ですが、私たちが今悩むべき問題ではありません。決議が採択された今、私たちが取り組むべき課題は、自分たちの世界を再建するために、人々をどう動員していくかということです。なぜなら、搾取は今日まで続いているからです。私たちは今もなお、植民地宗主国の多国籍企業取締役会に座る人々の銀行口座を肥やすために働かされている。この構造を断ち切らなければなりません。

私たちがすべきことは、自分たちの資源を自分たちが所有し、それを自分たちの利益のために活用できる政治・経済システムを構築するために、人々を動員することです。つまり、シオニスト運動と論争に勝つことでも、帝国主義諸国との議論に勝つことでもない。それは私たちの使命ではありません。私たちの使命は、ここからどこへ向かうのかを見定め、目的地に到達するための最も効果的な方法を見つけることなのです。

RJ: ではその目的地にたどり着く最も効果的な方法は何だと思えますか。

KP: **大衆の動員と連帯の構築**です。大衆動員とは、まず私たち自身の歴史—— アフリカの真の歴史を語り直し、人々を覚醒させ、行動へと導くことを意味します。動員は一つの領域だけで起きるのではなく、多方面で同時に進める必要があります。その一つが、アフリカ人の価値が低く見られてきた背景には、アフリカの精神性が低く評価されてきたことがある という点です。アフリカの精神性とヨーロッパの精神性は、**同じレベルで尊重されるべきものです**。さらに、私たちは「発展」について語られてきた物語—— 何が発展なのか、どの道が発展につながるのか という既存のナラティブそのものを問い直す必要があります。

そして、もう一つ私たちには語り直すべき歴史があります。ヨーロッパの博物館にあるアフリカの遺物について、私たちは「盗まれた遺物」と教えられています。そういわれると、まるで太鼓や彫刻の話だと思ってしまいます。しかし、本当はそうではありません。遺物と分類されるものの中には、私たちの祖先の遺骨も含まれています。私たちの祖先の頭や遺体。ヨーロッパの博物館に保管されているこれらの遺骨は、搾取に抵抗した英雄たち、支配に抵抗した人々、殺された人々の遺骨なのです。中には抵抗した人が首をはねられ、その頭部がヨーロッパに持ち込まれた例もあります。それが現在、展示品として公開されているのです。

この分野をもっと真剣に見つめれば、大西洋奴隷貿易に関する誤解のいくつかを正す助けになるはずです。今日よく言われるのは、「アフリカ人自身も共犯だった。自分たちの人々を売ったのだ」という主張です。しかし、この言い方は抵抗の戦争が存在した事実を完全に無視しています。

この地域を真剣に見れば、大西洋横断奴隷制に関する誤解を解消する助けになるでしょう。今日、私たちは「アフリカ人が共犯者だった」と言われ、自分たちの人々を売ったと言われています。しかし、抵抗戦争があったという事実は無視されています。抵抗戦争を戦った者たちが共犯者と非難されることはありません。もし私たちが共犯なら、なぜ彼らは私たちの英雄たちを殺したのです

か?なぜ私たちの英雄たちの遺体が西ヨーロッパで展示されているのでしょうか?そして、いわゆる遺物の返還を求めると、私たちは未発達だと言われます。私たちにはそんな洗練された博物館はありません。これは非常に侮辱的です。

祖先の罪をなぜつぐなわなければならないか

もう一つ面白いと思う議論があります。「なぜ先祖が犯した罪を私たちに責めるのか?」ヨーロッパ人は「先祖が犯した犯罪に責任を負うことはできない」と言います。その主張には根拠がありません。今日の世代はこれらの犯罪から恩恵を受け続けています。私がいつも挙げる例の一つがバークレイズ銀行です。バークレイズは奴隷商人だった二人のバークレー兄弟によって設立されました。現在、この銀行はヨーロッパ経済において重要な役割を果たしています。その貢献によってヨーロッパの発展は今日まで続いています。もし今日のヨーロッパがバークレイズ銀行の活動から利益を得ているのなら、「バークレー兄弟はもうずっと昔に死んだのだから、今の世代には責任がない」という主張は成り立ちません。西洋のあらゆる制度は、奴隷労働によって生み出された余剰（surpluses）を基盤として築かれてきたからです。

RJ: 補償（レパレーション）に反対する議論としてよく出てくるのが、「仕組みが複雑すぎて無理だ」というものです。誰が誰に支払うべきなのか、どの主体が責任を負うのか、どの制度が対象なのか——そうしたことが分からないから不可能だ、という主張です。

KW: 補償に反対する議論の一つに、「誰が誰にいくら払うのか分からないから複雑すぎる」というものがあります。しかし、この議論は、補償要求を金銭の支払いだけに矮小化する誤った前提に立っています。補償とは、単なる金銭の要求ではありません。それは、世界の構造そのものを再編するための要求です。そして、その再構築の取り組みには、今生きているすべての人が参加できます。

私たちが望んでいるのは、大量破壊兵器の製造に資源が使われる世界ではなく、人々の健康を促進するために資源が使われる世界をつくることです。この取り組みには誰もが参加できます。つまり、「補償は複雑すぎる」という反対論は、修復的正義を根本的に誤解しているところから生まれているのです。

RJ: あなたの苦労について、私たちが触れていない他の知っておくべきことはありますか。

KW: 強調すべき議論がもう一つあります。それは「アフリカ人は自分たちの人々を売った、共犯だった」という主張です。議論のために、仮に私たちが奴隷貿易に加担していたと認めるとしましょう。しかし、もし本当にアフリカ側も同じように参加していたのなら、なぜその利益がアフリカには残っていないのでしょうか？なぜ利益のすべてがヨーロッパにあるのでしょうか。

この事実そのものが、補償（レパレーション）が必要であることを示しています。つまり、仮に祖先が自発的に参加していたとしても、利益がアフリカではなく、アメリカ大陸とヨーロッパに蓄積されたという事実は、補償の正当性をさらに強めるものです。

さらに、アフリカの指導者たちは腐敗している、修復的正義は結局アフリカの指導者たちを富ませるだけだという議論もあります。繰り返しますが、これはアフリカの人々への侮辱だと思います。なぜなら腐敗はアフリカ特有の問題ではないからです。腐敗は普遍的なものです。腐敗は特権制度の創出から生まれます。そして特権のシステムは至る所にあります。実際、世界中で大規模な汚職の暴露が行われています。エプスタインのファイルとは、もし破損でなければ何でしょうか？イギリスの貴族院について話さなければなりません。そこでは貴族が納税者のお金を使ってポルノ素材を購入していたことが判明しました。アフリカの指導者が特に腐敗しているというこの考えは、人種差別的な物語に当てはまります。完全に拒否されるべきです。

クウェシ・ブラット・ジュニア彼はガーナの著名なジャーナリストであり、ガーナ社会主義運動の事務総長、Insight 新聞の編集長、そしてパン・アフリカンTV のディレクターです。2025 年にはジョン・マハマによる序文付き『Reparations: History, Struggle, Politics and Law』を出版しました。

ロビン・ヤスパートは政治経済学者であり、ドイツ・フランクフルトのゲーテ大学の博士課程の学生です。彼の研究は歴史的な南北関係、金融市場、財政・金融政策に焦点を当てています。

【翻訳チェック 田中靖宏】